

# 平成28年度 障がい者生活ニーズ実態調査 調査結果〔分析編〕

参考資料 1

## ■世代別の希望や困りごとへの回答状況について

障がい種別の集計ではなく、世代別に希望や困りごとを把握することを目的として、分析を行うこととする。  
 まず、回答者の年齢を、18歳未満、18歳以上65歳未満、65歳以上の3層に分け、便宜上、それぞれを「子ども世代」「大人世代」「高齢者世代」として整理する。その際、年齢未回答の回答者のデータは除外し、3473名分を元データとした。  
 その上で、「1. 今の暮らしと希望の暮らしについて」「2. 現在と希望する平日と休日の過ごし方について」「3. 様々な場面での困りごとについて」の側面から状況が把握できるよう集計し、世代ごとの特徴を捉える。

### 【1. 今の暮らしと希望の暮らしについて】

データ①：世代別×「問4 いまの暮らしと希望する暮らし」

			一人で暮らす	親や兄弟と暮らす	配偶者等と暮らす	友達・グループで暮らす	入所施設で暮らす	病院で暮らす	総計
高齢者	(65歳以上)	いまの暮らし	221	28	653	7	73	20	1002
		希望する暮らし	133	22	483	14	136	15	803
大人	(18歳以上65歳未満)	いまの暮らし	219	695	354	54	77	8	1407
		希望する暮らし	276	323	401	121	131	10	1262
子ども	(18歳未満)	いまの暮らし	1	705	4	2	6	1	719
		希望する暮らし	45	450	65	47	25	1	633

※無回答を除く

データ②：世代別×「問19 希望する暮らしに必要なこと」(回答は複数回答可)

		GH	GH以外の住宅	入所施設	体験の場	日常生活の介助や支援の充実	お金の管理	交流と相談	理解や配慮	総計
高齢者	(65歳以上)	83	110	211	59	310	55	99	160	1087
		8%	10%	19%	5%	29%	5%	9%	15%	
大人	(18歳以上65歳未満)	147	170	174	137	310	253	218	447	1856
		8%	9%	9%	7%	17%	14%	12%	24%	
子ども	(18歳未満)	78	78	65	135	190	130	120	281	1077
		7%	7%	6%	13%	18%	12%	11%	26%	

<データからわかること>

- 回答者を世代別に分類した上で、いまの暮らしと希望する暮らしの項目を見ると、いまの暮らしで多数を占める「一人で暮らす」「親や兄弟と暮らす」の項目が、希望する暮らしでは大きく減少し、逆に、「友達・グループで暮らす」「入所施設で暮らす」の項目が、希望する暮らしでは大きく増加した(データ①)。
- また、各世代の希望する暮らしに必要なことについて、全世代において「日常生活の介助や支援の充実」の回答が多く、さらに、高齢者においては「入所施設」、大人や子どもの世代においては、「理解や配慮」の項目が多くなっていた(データ②)。

### 【2. 現在と希望する平日と休日の過ごし方について】

データ①：世代別×「問15 現在の平日と休日の過ごし方」の回答状況

		現在	仕事をする	学校に通う	通所施設に通う	病院で過ごす	買い物・趣味・社会活動	外出はほとんどしない	総計
高齢者	(65歳以上)	平日	78		170	75	374	343	1040
		休日	5	1	18	26	356	531	937
大人	(18歳以上65歳未満)	平日	526	55	304	48	199	279	1411
		休日	12	5	9	16	768	566	1376
子ども	(18歳未満)	平日	1	607	44	3	7	24	686
		休日	1	8	46	3	432	169	659

※無回答を除く

データ②：世代別×「問16 希望する平日と休日の過ごし方」の回答状況

		希望	仕事をする	学校に通う	通所施設に通う	病院で過ごす	買い物・趣味・社会活動	外出はほとんどしない	総計
高齢者	(65歳以上)	平日	90	3	154	23	462	161	893
		休日	9	2	28	7	538	256	840
大人	(18歳以上65歳未満)	平日	703	32	234	27	241	99	1336
		休日	13	13	19	9	1066	207	1327
子ども	(18歳未満)	平日	127	455	60		13	8	663
		休日	6	2	41	1	562	38	650

※無回答を除く

<データからわかること>

- 現在の平日と休日の過ごし方と、希望する平日と休日の過ごし方を比較すると、大人と高齢者の世代において、「外出はほとんどしない」を希望する回答は大きく減少し、代わりに「買い物・趣味・社会活動」を希望する回答が大きく増加した(データ①②)。
- また、子どもの層では、「仕事をする」を希望する回答が大きく増加した(データ②)。

【3. 様々な場面での困りごとについて】

データ①: 世代別×「問18 日常生活の中の困りごと」(回答は複数回答可)

		収入	お金の管理等	障がい程度の重篤化	家族の高齢化	家族との関係	近隣住民との関係	相談できるところ	サービスの不足	バリアフリー	移動	総計
高齢者	(65歳以上)	362	49	230	259	24	29	48	37	99	251	1388
		26%	4%	17%	19%	2%	2%	3%	3%	7%	18%	
大人	(18歳以上65歳未満)	614	216	170	415	81	59	131	77	77	143	1983
		31%	11%	9%	21%	4%	3%	7%	4%	4%	7%	
子ども	(18歳未満)	48	64	28	59	25	14	69	110	58	99	574
		8%	11%	5%	10%	4%	2%	12%	19%	10%	17%	

データ②: 世代別×「問20 外出時の困りごと」(回答は複数回答可)

		段差・わかりにくい信号や点字ブロック	設備が不便	通行車両が危ない	公共交通が利用しにくい	移動支援が使いにくい	手助けがない	総計
高齢者	(65歳以上)	183	257	269	216	51	120	1096
		17%	23%	25%	20%	5%	11%	
大人	(18歳以上65歳未満)	128	240	274	230	136	292	1300
		10%	18%	21%	18%	10%	22%	
子ども	(18歳未満)	55	148	149	124	84	176	736
		7%	20%	20%	17%	11%	24%	

データ③: 世代別×「問35 余暇活動の困りごと」(回答は複数回答可)

		金銭的な余裕のなさ	介助や支援の不足	移動手段の利用しにくさ	建物の設備活動の環境	理解・配慮手助けのなさ	状態が不安定	友達がいらない	総計
高齢者	(65歳以上)	411	99	208	42	36	176	165	1137
		36%	9%	18%	4%	3%	15%	15%	
大人	(18歳以上65歳未満)	692	116	162	71	125	334	361	1861
		37%	6%	9%	4%	7%	18%	19%	
子ども	(18歳未満)	135	83	94	79	135	80	176	782
		17%	11%	12%	10%	17%	10%	23%	

<データからわかること>

- 各世代の困りごとを、日常生活、外出時、余暇活動ごとに見ると、まず日常生活においては、高齢者世代、大人世代では、「収入」「家族の高齢化」の回答が多かった。一方、子どもの世代においては、「サービスの不足」や「移動」の回答が多いことが特徴的であった(データ①)。
- 一方、外出時においては、「通行車両が危ない」「設備が不便」「公共交通が利用しにくい」の回答が共通して多かったほか、「手助けがない」の回答が、大人世代と子ども世代で多かった(データ②)。
- 余暇活動においては、「金銭的な余裕のなさ」が全ての世代において最も多く、その他、高齢者世代では「移動手段の利用しにくさ」、大人世代では「状態が不安定」「友達がいらない」、子ども世代では「友達がいらない」「理解・配慮・手助けのなさ」と、世代ごとに違いがみられた(データ③)。

## ■高齢の親と同居しているケースの状況とニーズについて

本人も高齢化が進んでおり、かつ、高齢の親と同居している状態にある者について、その状況とニーズを把握することを目的として、分析を行うこととする。  
 「本人が40歳以上」で、「現在、親と同居しており、父親が母親のいずれかが70歳以上」の条件でデータを抽出し、元データとする。※該当者 ⇒ 232人(身体:65人、知的:80人、精神:71人、発達4人、難病:12人)  
 その上で、「1. 障がいの状況に応じた困りごと」「2. 外出の状況」「3. 相談できる人の有無」の側面から状況を把握できるよう集計するとともに、このような状態像にある方々の「希望する暮らしに必要な支援」を明らかにする。

(参考)本調査の回答者のボリュームゾーン

- ・身体:60代~80代(全体の60.2%)
- ・知的:0~40代(全体の85.4%)
- ・精神:30代~70代(全体の85.7%)
- ・難病:40代~70代(全体の72.5%)
- ・発達:0~40代(全体の91.4%)

### 【1-1. 障がいの状況に応じた日常生活の困りごとについて】

データ①:障がい種別×「問18 日常生活の中の困りごと」(回答は複数回答可)

	収入	お金の管理等	障がい程度の重度化	家族の高齢化	家族との関係	近隣住民との関係	相談できるところ	サービスの不足	バリアフリー	移動	その他
身体	20	3	15	42			1		6	9	4
知的	21	24	6	58	4	2		3	1	2	4
精神	46	4	2	50	4	1	2			1	7
難病	8			6	1		2	1	1		1
発達	1	2		3	1						1
総計	96	33	23	159	10	3	5	4	8	12	17

データ②:障がい種別ごとの手帳の等級×「問18 日常生活の中の困りごと」(回答は複数回答可)

身体	収入	お金の管理等	障がい程度の重度化	家族の高齢化	家族との関係	近隣住民との関係	相談できるところ	サービスの不足	バリアフリー	移動	その他
1級	5	1	6	16					2	2	1
2級	3		3	9					1	2	2
3級	6	2	3	11					1	3	1
4級	2		2	1			1		1	1	
5級	3		1	5					1	1	
6級	1										
総計	20	3	15	42	0	0	1	0	6	9	4

知的	収入	お金の管理等	障がい程度の重度化	家族の高齢化	家族との関係	近隣住民との関係	相談できるところ	サービスの不足	バリアフリー	移動	その他
A	6	12	5	35		1		2	1	1	2
B1	11	11	1	18	3			1			
B2	4	1		4	1						2
手帳を持っていない				1							1
総計	21	24	6	58	4	1	0	3	1	2	4

精神	収入	お金の管理等	障がい程度の重度化	家族の高齢化	家族との関係	近隣住民との関係	相談できるところ	サービスの不足	バリアフリー	移動	その他
1級	1			1							
2級	18	3	1	22	3	1					6
3級	4			4							
自立支援医療のみ	17	1		16	1		1				1
手帳も医療もない	2			3						1	
総計	42	4	1	46	4	1	1	0	0	1	7

### <データからわかること>

○知的障がいと発達障がいは、回答者のボリュームゾーンが若い年代に集中している。

にもかかわらず、40歳以上でデータを整理した場合の、知的障がいが高齢の親と同居している数は、全ての障がい種別の中で最も多かった。

○難病と精神障がいの回答者のボリュームゾーンは近いが、難病については、高齢の親と同居しているケースは少なかった。

○「高齢の親と同居する40代以上の障がい者」の日常生活の困りごとについては、「家族の高齢化」、次いで「収入」の回答が特に多かった(データ①)。

○回答のデータを障がい種別ごとに分け、程度ごとに回答状況を整理すると(データ②)、「家族の高齢化」「収入」の回答が多いという特徴に加えて、身体障がいと知的障がいでは、障がいの程度が重くなるほど、「障がい程度の重度化」を困りごととする回答が多くなることが見受けられる。

また、知的障がいでは、「お金の管理や法的な手続きができない」ことを困りごととする回答が多いという特徴も確認できた。

【1-2. 障がいの状況に応じた外出時及び余暇活動の困りごとについて】

データ①: 障がい種別 × 「問20 外出時の困りごと」(回答は複数回答可)

	段差・わかりにくい信号や点字	設備が不便	通行車両が危ない	公共交通が利用しにくい	移動支援が使いにくい	手助けがない	総計
身体	10	15	12	11	5	13	66
知的	7	4	16	7	10	12	56
精神		5	6	5	1	12	29
難病		2	2	2	1	3	10
発達			1			1	2
総計	17	26	37	25	17	41	163

データ②: 障がい種別ごとの手帳の等級 × 「問20 外出時の困りごと」(回答は複数回答可)

身体	段差・わかりにくい信号や点字ブロック	設備が不便	通行車両が危ない	公共交通が利用しにくい	移動支援が使いにくい	手助けがない	総計
1級	5	6	5	5	4	4	29
2級	3	7	7	5	3	5	30
3級	2	3	7	3	2	2	19
4級	1	5	2	1		3	12
5級	2	1	2	3		2	10
6級						1	1
総計	13	22	23	17	9	17	101

知的	段差・わかりにくい信号や点字ブロック	設備が不便	通行車両が危ない	公共交通が利用しにくい	移動支援が使いにくい	手助けがない	総計
A	4	5	9	4	9	8	39
B1	2	1	6	2	2	6	19
B2	2	1	4	1			8
手帳を持っていない	5	13	9	11	4	21	63
総計	13	20	28	18	15	35	129

精神	段差・わかりにくい信号や点字ブロック	設備が不便	通行車両が危ない	公共交通が利用しにくい	移動支援が使いにくい	手助けがない	総計
1級							0
2級	1	5	8	5		14	33
3級	1	2	3	1			7
自立支援医療のみ	2	1	5	3	2	4	17
手帳も医療もない	5	8	8	9	8	12	50
総計	9	16	24	18	10	30	107

データ③: 障がい種別 × 「問35 余暇活動の困りごと」(回答は複数回答可)

	金銭的な余裕のなさ	介助や支援の不足	移動手段の利用しにくさ	建物の設備活動の環境	理解・配慮手助けのなさ	状態が不安定	友達がいない	総計
身体	23	5	12	4	5	9	13	71
知的	21	11	9	1	7	16	26	91
精神	45		5	2	1	21	23	97
難病	7		1	1	1	3	1	14
発達	1					2	3	6
総計	97	16	27	8	14	51	66	279

データ④: 障がい種別ごとの手帳の等級 × 「問35 余暇活動の困りごと」(回答は複数回答可)

身体	金銭的な余裕のなさ	介助や支援の不足	移動手段の利用しにくさ	建物の設備活動の環境	理解・配慮手助けのなさ	状態が不安定	友達がいない	総計
1級	6	5	5	1	2	4	4	27
2級	13	1	6		1	8	10	39
3級	8	2	4	1	2	4	5	26
4級	3	1	1	2	1	1	3	12
5級	6		1	1	1	2	1	12
6級	2					1		3
総計	38	9	17	5	7	20	23	119

知的	金銭的な 余裕のなさ	介助や支援 の不足	移動手段の 利用しにくさ	建物の設備 活動の環境	理解・配慮 手助けのなさ	状態が 不安定	友達がいない	総計
A	9	9	7	1	7	12	11	56
B1	9	4	3		1	3	12	32
B2	2					3	5	10
手帳を持っていない	45	2	11	6	4	21	23	112
総計	65	15	21	7	12	39	51	210

精神	金銭的な 余裕のなさ	介助や支援 の不足	移動手段の 利用しにくさ	建物の設備 活動の環境	理解・配慮 手助けのなさ	状態が 不安定	友達がいない	総計
1級						1		1
2級	26	1	6	1	1	17	16	68
3級	5	1	2			3	5	16
自立支援医療のみ	17		1	1		8	13	40
手帳も医療もない	24	4	8	5	8	9	11	69
総計	72	6	17	7	9	38	45	194

<データからわかること>  
 ○「高齢の親と同居する40代以上の障がい者」の外出時の困りごとについては、身体障がいと知的障がいに特に多く困りごとが見られた(データ①)。内訳としては、知的障がいについては「通行車両が危ない」、身体障がいについては「設備が不便」の項目が多くなっていたが、それらを障がい程度別に見たところ(データ②)、知的障がいで「手帳を持っていない」層が、多く「手助けがない」を回答していた。  
 ○「高齢の親と同居する40代以上の障がい者」の余暇活動の困りごとについては、「金銭的な余裕のなさ」と「友達がいない」「状態が不安定」といった項目が特に多かった(データ③)。それらを障がい程度別に見たところ(データ④)、有意な特徴は確認できなかった。

## 【2. 外出の状況について】

データ①:「問15 現在の平日と休日の過ごし方」の回答状況

	仕事をする	学校に通う	通所施設に通う	病院で過ごす	買い物・趣味・社会活動	外出はほとんどしない	総計
平日	78	1	42	8	31	56	216
休日			2	3	102	102	209

※無回答を除く

データ②:「問16 希望する平日と休日の過ごし方」の回答状況

	仕事をする	学校に通う	通所施設に通う	病院で過ごす	買い物・趣味・社会活動	外出はほとんどしない	総計
平日	105	2	29	5	34	22	197
休日	2	1	4	1	144	42	194

※無回答を除く

データ③:データ①で「外出はほとんどしない」と回答した者の、「問18 日常生活の中の困りごと」の回答状況(抜粋)と、「問20 外出時の困りごと」の回答状況

問18	支援や介助の不足	不十分な バリアフリー	移動が不便
身体		4	6
知的	2		1
精神			1
難病	1	1	
発達			
総計	3	5	8

問20	段差・わかりにくい 信号や点字 ブロック	設備が不便	通行車両が 危ない	公共交通が 利用しにくい	移動支援が 使いにくい	手助けがない
身体	5	10	8	7	4	12
知的	2	1	3	4	2	3
精神		2	3	5		6
難病		1	1		1	3
発達			1			1
総計	7	14	16	16	7	25

<データからわかること>  
 ○データ①とデータ②を比較すると、「高齢の親と同居する40代以上の障がい者」の多くが、平日は仕事、休日は買い物や趣味等で外出を希望しているが、実際には「外出はほとんどしない」の回答の割合が多くなっている。  
 ○データ①で「外出はほとんどしない」と回答した層が、「外出したくてもできない」状態ではないかという仮説のもと、問18の回答状況を確認したが、外出の困難さとリンクする項目への回答は少数であり、状態を確認するには至らなかった(データ③)。なお、問20の回答状況を確認すると、「手助けがない」の回答が多く見られた(データ③)。

【3. 相談できる人の有無について】

データ: 障がい種別×「問33 悩みや心配事を相談する人」

	家族	友だち	ヘルパーや 施設等職員	学校の先生・ 職場の人	相談機関	医師・看護師	いない	総計
身体	23	9	3	2	1	2	5	45
知的	32		5		4	1	9	51
精神	35	4	3		1	6	6	55
難病	5	1	1				3	10
発達	2						2	4
総計	97	14	12	2	6	9	25	165

※無回答及び「その他」を除く

<データからわかること>

○「高齢の親と同居する40代以上の障がい者」の主な相談相手は、「家族」と「いない」で半数以上を占めており、家の外に相談できる相手がいない場合が多い傾向が確認できた。

【4: 希望する暮らしに必要な支援について】

データ①: 障がい種別×「問4 希望する暮らし」

	一人で暮らす	親や兄弟 と暮らす	配偶者等 と暮らす	友達・グルー プ で暮らす	入所施設 で暮らす	病院で暮らす	総計
身体	15	27	11	1	5	1	60
知的	3	37	1	7	14	1	63
精神	18	31	10		1		60
難病	3	8		1			12
発達	1	2	1				4
総計	40	105	23	9	20	2	199

※無回答除く

データ②: 「問4 希望する暮らし」×「問19 希望する暮らしに必要なこと」(回答は複数回答可)

	GH	GH以外の住 宅	入所施設	体験の場	日常生活の 介助や支援 の充実	お金の管理	交流と相談	理解や配慮	総計
一人で暮らす		11		7	6	4	8	13	49
親や兄弟と暮 らす	7	9	10	11	22	20	15	28	122
配偶者等と暮 らす	2	3	2	1	6	2	3	2	21
友達・グルー プで暮らす	5	2	1	1	2	2	1	3	17
入所施設で 暮らす	3	3	9	3	6	1	2	2	29
病院で暮らす	1							1	2

<データからわかること>

○「高齢の親と同居する40代以上の障がい者」が希望する暮らしは、「親や兄弟と暮らす」が突出して多かった(データ①)。また、希望する暮らしの形態と、その暮らしのために必要なことをクロス集計したところ、「親や兄弟と暮らす」を選択した者が最も多くの支援を必要としており、その内容は、「日常生活の介助や支援の充実」「お金の管理」「交流や相談の場」「理解や配慮」と様々であった(データ②)。

## ■親と同居している場合の親の年代について

親と同居している場合の、障がい種別の親の年代を知る為、「問4 今の暮らし」で、「2 親や兄弟と暮らす」を選んだ回答者を抽出し、1437名を元データとした上で、障がい種別と、親の年齢のクロス集計を行った。

(参考)本調査の回答者のボリュームゾーン

- ・身体:60代～80代(全体の60.2%)
- ・知的:0～40代(全体の85.4%)
- ・精神:30代～70代(全体の85.7%)
- ・難病:40代～70代(全体の72.5%)
- ・発達:0～40代(全体の91.4%)

データ:障がい種別×「問4 「2 親や兄弟と暮らす」を選んだ場合の親の年齢」

		20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代	無回答	総計
身体	父親	3	75	153	38	27	20	10	1	111	438
	母親	5	107	158	32	33	30	22	5	46	438
知的	父親	7	56	132	95	71	51	12	1	174	599
	母親	10	73	163	118	73	54	15	3	90	599
精神	父親			5	9	26	30	22		80	172
	母親		1	9	17	41	44	20		40	172
難病	父親		7	6	8	5	6	3		11	46
	母親		8	9	7	5	10	1		6	46
発達	父親		5	55	67	17	6	1		31	182
	母親		9	71	69	9	3			21	182

※無回答を除く

<データからわかること>

- 回答者のボリュームゾーンが、0代から40代に集中している知的障がいと発達障がいについては、40代から50代の親との同居が多かった。
- また、回答者のボリュームゾーンが高齢に偏っている身体障がいや精神障がいについて、精神障がいは高齢の親と同居している状況が見られるが、身体障がいは、若い親との同居が際立っていた。

## ■施設入所者の困りごととニーズについて

現在、施設に入所している障がい者について、その状況や困りごとを把握し、今後希望する暮らしと、そのためのニーズを把握することを目的として、分析を行うこととする。  
 まず、本調査の回答から、「現在入所施設で暮らしている」の条件でデータを抽出し、元データとする。※該当者 ⇒ 89人(身体:22人、精神:8人、知的:56人、難病:1人、発達2人)  
 その上で、「1. 平日と休日の過ごし方」「2. 様々な場面での困りごと」の側面から状況を把握できるよう集計するとともに、このような状態像にある方々の「3. 希望する暮らしに必要なこと」を明らかにする。

### 【1. 平日と休日の過ごし方について】

データ①:「問15 現在の平日と休日の過ごし方」の回答状況

	仕事をする	学校に通う	通所施設に通う	病院で過ごす	買い物・趣味・社会活動	外出はほとんどしない
平日	10	6	12	4	5	27
休日				6	22	34

※無回答を除く

データ②:「問16 希望する平日と休日の過ごし方」の回答状況

	仕事をする	学校に通う	通所施設に通う	病院で過ごす	買い物・趣味・社会活動	外出はほとんどしない
平日	11	4	12	2	12	13
休日			1	3	44	9

※無回答を除く

<データからわかること>

○データ①とデータ②を比較すると、施設入所者の多くが、現在は、平日も休日も、「外出はほとんどしない」と回答しているが、希望としては、特に休日には、「買い物・趣味・社会活動」のために外出したいと感じていることが読み取れる。

### 【2. 様々な場面での困りごとについて】

データ①:障がい種別×「問18 日常生活の中の困りごと」(回答は複数回答可)

	収入	お金の管理等	障がい程度の重度化	家族の高齢化	家族との関係	近隣住民との関係	相談できる場所	サービスの不足	バリアフリー	移動	その他
身体		2	5	3	2		1	3		2	5
知的	9	4	5	4	2		2	5		8	11
精神	4						1	1	1	2	
難病		1									1
発達		2	1	1							
総計	13	9	11	8	4	0	4	9	1	12	17

データ②:障がい種別×「問20 外出時の困りごと」(回答は複数回答可)

	段差・わかりにくい信号や点字ブロック	設備が不便	通行車両が危ない	公共交通が利用しにくい	移動支援が使いにくい	手助けがない
身体	2	5	2	2	7	1
知的	1	6	6	10	11	5
精神	1	1		4	1	1
難病					1	
発達					1	
総計	4	12	8	16	21	7

データ③:障がい種別×「問35 余暇活動の困りごと」(回答は複数回答可)

	金銭的な余裕のなさ	介助や支援の不足	移動手段の利用しにくさ	建物の設備活動の環境	理解・配慮手助けのなさ	状態が不安定	友達がいない
身体	3	3	4	1		1	1
知的	7	9	5	1	9	11	4
精神	4	1	1	1		1	2
難病		1				1	
発達		1				1	
総計	14	15	10	3	9	15	7



<データからわかること>

○日常生活の中の困りごとについて、特徴的な回答の分布は確認できなかったが、比較的「収入」「移動」「障がい程度の重度化」という回答が多かった(データ①)。

○外出時の困りごとについては、移動支援が使いにくい(使えない)ことや、公共交通の利用しにくさについての回答が多かった。(データ②)

○余暇活動の困りごとについては、特徴的な回答の分布は確認できなかったが、比較的「介助や支援の不足」「状態が不安定」「金銭的な余裕のなさ」という回答が多かった(データ③)。

【3. 希望する暮らしに必要なことについて】

データ①: 障がい種別 × 「問4 希望する暮らし」

	一人で暮らす	親や兄弟と暮らす	配偶者等と暮らす	友達・グループで暮らす	入所施設で暮らす	病院で暮らす	総計
身体	1		2	3	8	8	22
知的	3	9		3	29	12	56
精神	3				2	3	8
難病					1		1
発達		2					2
総計	7	11	2	6	40	23	89

データ②: 障がい種別 × 「問19 希望する暮らしに必要なこと」(回答は複数回答可)

	GH	GH以外の住宅	入所施設	体験の場	日常生活の介助や支援の充実	お金の管理	交流と相談	理解や配慮	総計
身体		3	9	2	7	2	3	1	27
知的	5	5	13		23	1	4	13	64
精神	1		2	1	2	2	2	2	12
難病			1			1			2
発達				1	2			1	4
総計	6	8	25	4	34	6	9	17	109

<データからわかること>

○現在、施設に入所している方が、今後希望する暮らしとしては、「入所施設で暮らす」「病院で暮らす」の回答が大半を占めていた(データ①)。

○また、そのような暮らしを実現するために必要なこととして、「入所施設が多くあること」「日常生活の介助や支援が充実していること」の回答が多い(データ②)。

## ■年齢、障がい程度別の通院回数と、通院回数に応じた医療費の負担感について

地域で暮らす障がい者にとって、通院や、それに伴う医療費は重要なファクターを占める。そこで、「1. 年齢、障がい程度別の通院の状況」と、「2. 通院の頻度と医療費の負担感」について把握を試みることにする。なお、この際、年齢を65歳以上と65歳未満に分けてデータを整理するため、年齢について記載のなかった回答を除外したものを元データとする。

### 【1. 年齢、障がい程度別の通院の状況について】

#### データ①:「問2 年齢(65歳以上・未満)で整理」×「問31 通院回数」

	ほとんど毎日通院している	週に2回から3回程度	週に1回程度	月に2回から3回程度	月に1回程度	通院していない	入院している	総計
65歳以上	36	159	69	246	412	82	29	1033
	3%	15%	7%	24%	40%	8%	3%	100%
65歳未満	24	108	106	392	876	425	30	1961
	1%	6%	5%	20%	45%	22%	2%	100%

※無回答を除く

#### データ②:「問2 年齢(65歳以上・未満)で整理」×障がい種別×「問31 通院回数」

		ほとんど毎日通院している	週に2回から3回程度	週に1回程度	月に2回から3回程度	月に1回程度	通院していない	入院している	総計
65歳以上	身体	28	131	56	203	317	73	23	831
		3%	16%	7%	24%	38%	9%	3%	100%
	知的	0	1	1	2	13	6	3	26
		0%	4%	4%	8%	50%	23%	12%	100%
	精神	7	9	9	22	49	1	2	99
		7%	9%	9%	22%	49%	1%	2%	100%
難病	1	18	3	18	33	1	1	75	
	1%	24%	4%	24%	44%	1%	1%	100%	
発達	0	0	0	1	0	1	0	2	
	0%	0%	0%	50%	0%	50%	0%	100%	
65歳未満	身体	10	58	44	135	275	95	14	631
		2%	9%	7%	21%	44%	15%	2%	100%
	知的	3	14	24	99	269	259	7	675
		0%	2%	4%	15%	40%	38%	1%	100%
	精神	11	29	32	115	199	8	7	401
		3%	7%	8%	29%	50%	2%	2%	100%
難病	0	6	1	20	51	1	2	81	
	0%	7%	1%	25%	63%	1%	2%	100%	
発達	0	1	5	23	82	62	0	173	
	0%	1%	3%	13%	47%	36%	0%	100%	

※無回答を除く

#### データ③:障がい種別・程度別×「問31 通院回数」

	ほとんど毎日通院している	週に2回から3回程度	週に1回程度	月に2回から3回程度	月に1回程度	通院していない	入院している	通院者の総計	母数	母数に対する通院者の割合
身体1級	19	94	31	139	226	44	22	509	651	78%
身体2級	9	49	37	92	154	34	12	341	440	78%
知的A	5	14	28	110	239	94	10	396	586	68%
精神1級	6	8	2	13	23	3	5	52	74	70%
精神2級	5	19	22	89	130	15	2	265	303	87%
高次脳機能障がい	2	12	3	19	38	8	7	74	150	49%
難病	13	67	35	140	252	18	14	507	626	81%
発達障がい	0	11	19	75	230	187	4	335	653	51%

※無回答を除く

#### <データからわかること>

- 65歳以上と65歳未満の層に分類して、通院回数を確認したところ、65歳以上がより頻繁に通院している状況が確認できた。(データ①)また、さらに障がい種別で分析したところ(データ②)、種別ごとの際立った特徴は見当たらなかったが、知的障がいは全年齢を通じて医療にかかる頻度が少ない傾向が見られた。
- 通院回数を障がい種別や、障がい程度で確認したところ、いずれの層においても通院者の割合は多くを占めていた。(データ③)

【2. 通院の頻度と医療費の負担感について】

データ①:「問18 日常生活の中の困りごと(収入に関する項目を抜粋)」「問35 余暇活動をする上での困りごと(金銭に関する項目を抜粋)」(いずれも回答は複数回答可)×「問31 通院回数」

	ほとんど毎日 通院している (60)	週に2回から 3回程度 (266)	週に1回程度 (174)	月に2回から 3回程度 (627)	月に1回程度 (1263)	通院していな い (479)	入院している (59)	総計 (2928)
日常生活での困りごとにおける「収入が少ない」	25	103	59	214	392	124	10	927
	42%	39%	34%	34%	31%	26%	17%	32%
余暇活動での困りごとにおける「金銭的な余裕がない」	28	122	60	260	487	153	11	1121
	47%	46%	34%	41%	39%	32%	19%	38%

データ②:「問14 1か月の収入(「働いてもらっているお金」または「障がい基礎年金や特別障がい者手当等のお金」の項目のみに回答した者)×「問31 通院回数」

	ほとんど毎日 通院している	週に2回から 3回程度	週に1回程度	月に2回から 3回程度	月に1回程度	通院していな い	入院している	総計
働いてもらっているお金のみのみ	2	12	14	39	125	75	0	267
	1%	4%	5%	15%	47%	28%	0%	100%
障がい基礎年金や特別障がい者手当等のお金のみのみ	10	36	18	83	171	30	19	367
	3%	10%	5%	23%	47%	8%	5%	100%

データ③:「問32 病院や診察などを受けるときの困りごと」(回答は複数回答可)×「問31 通院回数」

	ほとんど毎日 通院している (60)	週に2回から 3回程度 (266)	週に1回程度 (174)	月に2回から 3回程度 (627)	月に1回程度 (1263)	通院していな い (479)	入院している (59)	総計 (2928)
通院介助の確保	6	19	16	50	79	26	3	199
	10%	7%	9%	8%	6%	5%	5%	7%
施設のバリアフリー	3	9	5	12	27	11	1	68
	5%	3%	3%	2%	2%	2%	2%	2%
医師や看護師の障がい理解	4	11	9	49	82	51	1	207
	7%	4%	5%	8%	6%	11%	2%	7%
医師や看護師とのコミュニケーション	6	24	23	49	117	92	6	317
	10%	9%	13%	8%	9%	19%	10%	11%
入院を断られる		3	6	19	20	3	5	56
		1%	3%	3%	2%	1%	8%	2%
自宅での医療が受けにくい	3	7	4	14	27	6	2	63
	5%	3%	2%	2%	2%	1%	3%	2%
医療費が高い	9	13	16	73	149	41	7	308
	15%	5%	9%	12%	12%	9%	12%	11%
病院が少ない、診察を断られる	4	11	14	47	97	34	4	211
	7%	4%	8%	7%	8%	7%	7%	7%

<データからわかること>

- 日常生活よりも余暇活動をする上で、金銭的な困りごとを感じている率がやや高い傾向がある(データ①)。
- 通院頻度では、「ほとんど毎日」及び「週2～3回」のカテゴリーで金銭的負担感がやや高い傾向がある(データ①)。
- 1か月の収入が、「働いてもらっているお金のみのみ」と「障がい基礎年金や特別障がい者手当等のお金のみのみ」の層で、通院頻度を確認したところ、いずれも「月に一回程度」が最も多くなっていた(データ②)。
- データ③により、通院頻度別に、病院や受診時の困りごとの相関を検証したが、有意な相関は確認できなかった。

## ■障がい種別、障がい程度別の災害時の困りごとについて

災害時の困りごとについては、各障がい種別ごとの様々な状態像ごとに、適切に把握しなければならない。そこで、「問36 災害時の困りごと」の回答について、身体障がい、知的障がい、精神障がいの手帳等級ごとの回答状況について集計するとともに、発達障がい、高次脳機能障がい、難病ごとの回答状況についても集計し、その特徴を捉える。

※以下の各集計表で「避難所での生活」の「ハード面」とは建物の構造・設備・個室がない等、「ソフト面」とは周囲の理解、コミュニケーション、介護等を意味します。

データ①：障がい種別ごとの手帳の等級×「問36 災害時の困りごと」(回答は複数回答可)

〔身体〕	災害情報の取得	安全な場所への移動	避難所での生活(ハード面)	避難所での生活(ソフト面)	福祉避難所の数と情報	医療的ケアや医薬品	総計
1級(656)	38	317	100	106	163	148	872
2級(445)	42	237	69	77	133	60	618
3級(344)	38	115	53	34	72	52	364
4級(406)	53	153	51	37	68	58	420
5級(100)	8	32	17	10	31	20	118
6級(115)	19	32	18	9	20	9	107
総計	198	886	308	273	487	347	2499

※手帳の不所持や無回答を除く

〔知的〕	災害情報の取得	安全な場所への移動	避難所での生活(ハード面)	避難所での生活(ソフト面)	福祉避難所の数と情報	医療的ケアや医薬品	総計
A(590)	25	386	105	223	228	50	1017
B1(273)	47	116	21	67	89	20	360
B2(335)	46	130	30	86	100	23	415
総計	118	632	156	376	417	93	1792

※手帳の不所持や無回答を除く

〔精神〕	災害情報の取得	安全な場所への移動	避難所での生活(ハード面)	避難所での生活(ソフト面)	福祉避難所の数と情報	医療的ケアや医薬品	総計
1級(84)	10	30	11	23	18	11	103
2級(314)	42	74	44	71	79	68	378
3級(113)	17	21	19	21	24	29	131
自立支援医療のみ(302)	34	79	48	60	63	65	349
総計	103	204	122	175	184	173	961

※無回答を除く

データ②：「問9 発達障がいの診断」×「問36 災害時の困りごと」(回答は複数回答可)

発達	災害情報の取得	安全な場所への移動	避難所での生活(ハード面)	避難所での生活(ソフト面)	福祉避難所の数と情報	医療的ケアや医薬品	総計
広汎性発達障がい・自閉症スペクトラム症(485)	41	208	87	230	166	25	757
注意欠陥多動性障がい(61)	7	19	14	21	25	7	93
学習障がい(75)	14	23	10	15	24	6	92

データ③：「問10 高次脳機能障がいの診断」×「問36 災害時の困りごと」(回答は複数回答可)

高次脳機能障がい	災害情報の取得	安全な場所への移動	避難所での生活(ハード面)	避難所での生活(ソフト面)	福祉避難所の数と情報	医療的ケアや医薬品	総計
高次脳機能障がい(152)	11	59	20	13	32	7	142

データ④：「問11 難病」×「問36 災害時の困りごと」(回答は複数回答可)

難病	災害情報の取得	安全な場所への移動	避難所での生活(ハード面)	避難所での生活(ソフト面)	福祉避難所の数と情報	医療的ケアや医薬品	総計
難病(648)	49	282	94	106	178	183	892

<データからわかること>

- 全ての障がい種別において、「安全な場所への移動」「福祉避難所の数と情報」への回答が際立っていた(データ①②③④)。
- 知的障がい、精神障がい、発達障がいのうち「広汎性発達障がい・自閉症スペクトラム症」については、「避難所での生活(ソフト面)」の回答が多いという特徴が確認できた(データ①②)。
- 難病については、「医療的ケアや医薬品」の回答が多く、医療面での不安の高さが際立っていた(データ④)。

## ■暮らし全体を通じての差別やいやな思いの経験について

「問39 差別やいやな思いの経験」について、日々の暮らしを通じて、障がい者が最も多く経験する差別やいやな思いを把握するため、場所ごとの回答を一本化し、項目ごとに集計する。

データ:「問39 差別やいやな思いの経験」の場所ごとの回答を一本化し、再集計。

	学校	職場・仕事	病院・福祉施設	お店	電車・バス	住居・住まい	近所づきあい	役所	総計
無視される、仲間外れにされる	346	99	16	15	8	23	66	8	581
じろじろ見られたり指をさされる	142	39	182	369	397	73	206	68	1476
子ども扱いされる	41	22	27	17	5	38	16	16	182
助けてほしい時に助けてもらえない	112	145	101	66	116	51	45	105	741
入居・入店・乗車などを拒否される		5	16	35	19	15	2	3	95
総計	641	310	342	502	545	200	335	200	3075

<データからわかること>

○暮らし全体を通じての差別やいやな思いについては、「じろじろ見られたり指をさされる」が突出して多い回答状況だった。

○なお、場面ごとの回答状況については、「学校」が最も多いという結果であった。